



首都圏中央連絡自動車道(さがみ縦貫道路)
建設事業に伴う発掘調査

かわらぐちぼうじゅう
河原口坊中遺跡
(海老名市No.52 遺跡)

銅釧と木製品が出土!

かわらぐちぼうじゅう
河原口坊中遺跡の発掘調査

(財)かながわ考古学財団では、さがみ縦貫道路建設事業・さがみグリーンライン(自転車道整備)事業・相模川河川改修事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。

調査では、弥生～江戸時代までの遺構や遺物が多数発見されています。

なかでも弥生時代の青銅製の小銅鐸や銅釧は類例が少ないもので大きな発見になりました。

今回発見された遺構や遺物などは、今後の出土品整理や分析などを経て発掘調査報告書として刊行され、広く公表されます。

これら先人達の足跡を、郷土海老名の歴史を探る資料として、活用して頂ければ幸いです。



財団法人 かながわ考古学財団



河川改修地区出土
小銅鐸の展開写真



銅釧出土状況 P22D

YH28号竪穴住居出土

有鉤銅釧

【小銅鐸】銅鐸形銅製品・弥生時代後期
調査区南側の地表下2.3m(標高19.2m)の硬化面の底面で認められた掘り込みから小銅鐸が出土しました。小銅鐸は全高7.9cm・長径4.1cm・短径3.4cmのほぼ完形品です。
小銅鐸は弥生中期～古墳時代前期に作られた小型青銅製品で、九州・中国地方や東海・関東地方など、銅鐸分布圏縁辺に多く分布します。全国でも約50例しかなく、県内では3例目の出土となりますが、これまでの出土例に比べて遺存状態がきわめて良好です。

県内出土例は海老名市本郷遺跡と平塚市広川公所遺跡群内沢遺跡があります。

【有鉤銅釧】銅製品・弥生時代後期
釧は腕輪のことです。南海産の貝殻でつくったものを模しています。幅は5.6cmで約1/2を欠損しています。この出土品は貝の特徴が残る形であったと考えられ、希少な出土例です。

【調査概要】

遺跡名 河原口坊中遺跡(海老名市No.52) **所在地** 海老名市河原口151他
調査原因 建設首都圏中央連絡道(さがみ縦貫道)建設事業に伴う調査
調査面積 2,469㎡(平成18年度1,091㎡・平成19年度1,378㎡)
調査期間 2006(平成18)年6月～2008(平成20)年3月(次年度へ継続予定)
主な発見遺構 弥生～古墳時代 竪穴住居・方形周溝墓・溝・土坑
奈良・平安時代 竪穴住居・溝・井戸・土坑・ピット
鎌倉～江戸時代 掘立柱建物・竪穴状遺構・溝・井戸・土坑
主な出土遺物 弥生～古墳時代 小銅鐸・有鉤銅釧・銅鏃・土器・石器(磨製石斧・有頭石錘)・石製品(管玉)・ガラス玉
奈良・平安時代 土師器・須恵器・灰釉陶器・石帯・砥石・土錘など
鎌倉～江戸時代 国産陶磁器・中国製磁器・かわらけ・砥石・煙管など



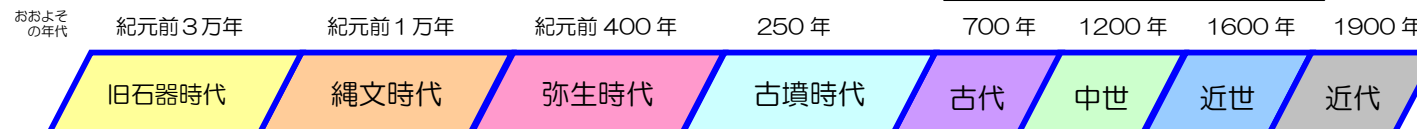
P25 弥生中期住居群



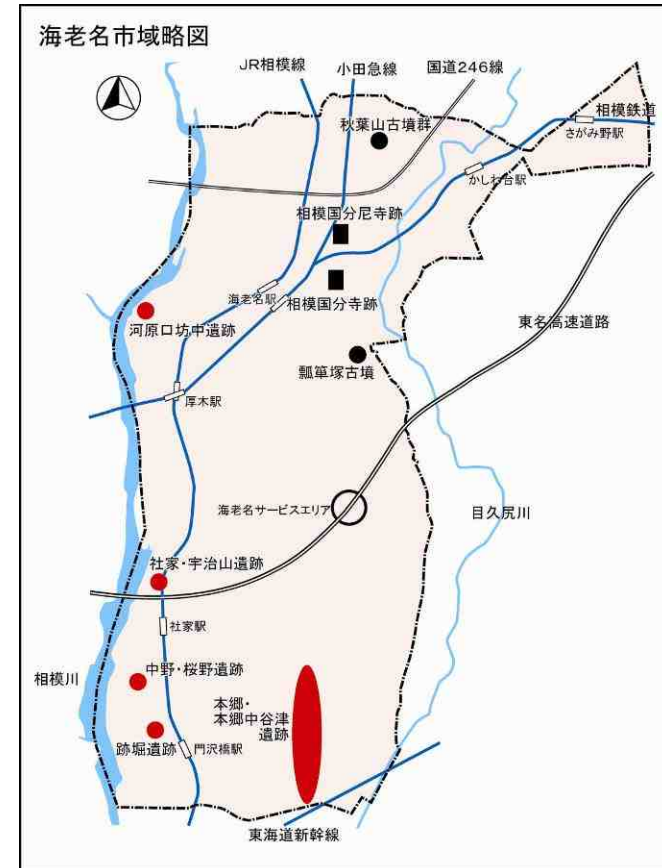
P26 調査状況



調査区航空写真



※赤色部分は、今回の調査で発見された遺構や遺物のおおよその時期を示しています。



【用語説明】

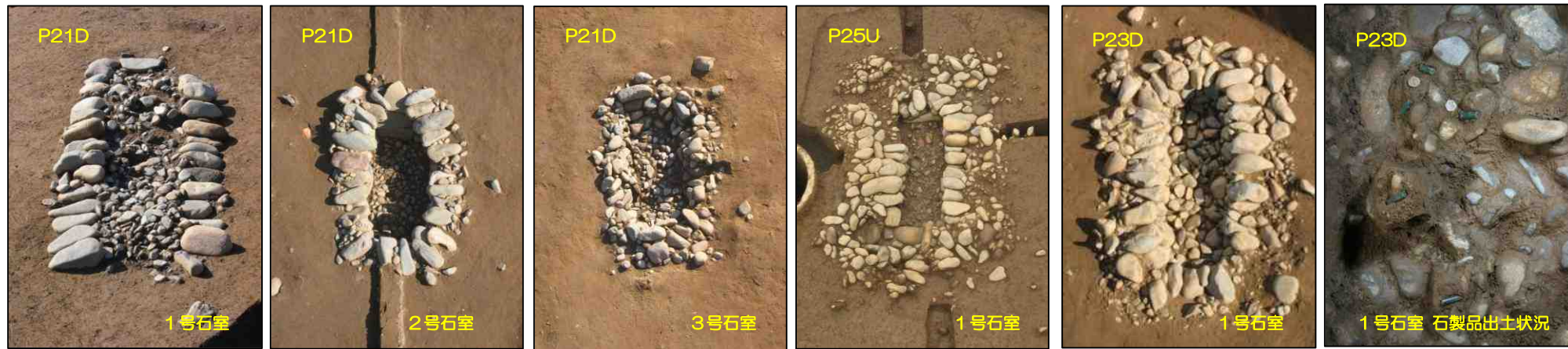
- 【遺構】** 住居跡や溝・井戸などが構築した施設の跡。
- 【遺物】** 出土した土器や石器など、人が使用していた道具類。
- 【竪穴住居】** 地面を掘り込み、平坦に均した床面を造り、上屋をかけた住居。柱穴と炉やカマドを有する。
- 【土坑】** 地面に掘られた穴。墓・貯蔵穴など多様である。
- 【古墳】** 3世紀末～7世紀代に造られた盛り土をもつお墓。
- 【石室】** 古墳の内部施設で、石材を積み上げて造る。
- 【高杯】** 皿や椀に脚が付く、食べ物や供え物を盛り付ける器。
- 【火鑽臼】** 発火具の台木のこと。木製の台の上に堅い棒を押しつけて回転させ、摩擦熱によって火をおこす。
- 【磨製石斧】** 研磨して刃を造りだした石斧。
- 【斧台】** 磨製石斧を固定し、柄に取り付けるための部品。
- 【石帯】** 奈良・平安時代に身分の高い人が身につけた革帯・腰帯の石製飾り具。

首都圏中央連絡自動車道(さがみ縦貫道路)
建設事業に伴う発掘成果

河原口坊中遺跡(海老名市No.52 遺跡)
2008年3月22日



財団法人 かながわ考古学財団
〒232-0033 横浜市内南区中村町3-191-1
Tel. 045-252-8689 <http://www.kaf.or.jp/>

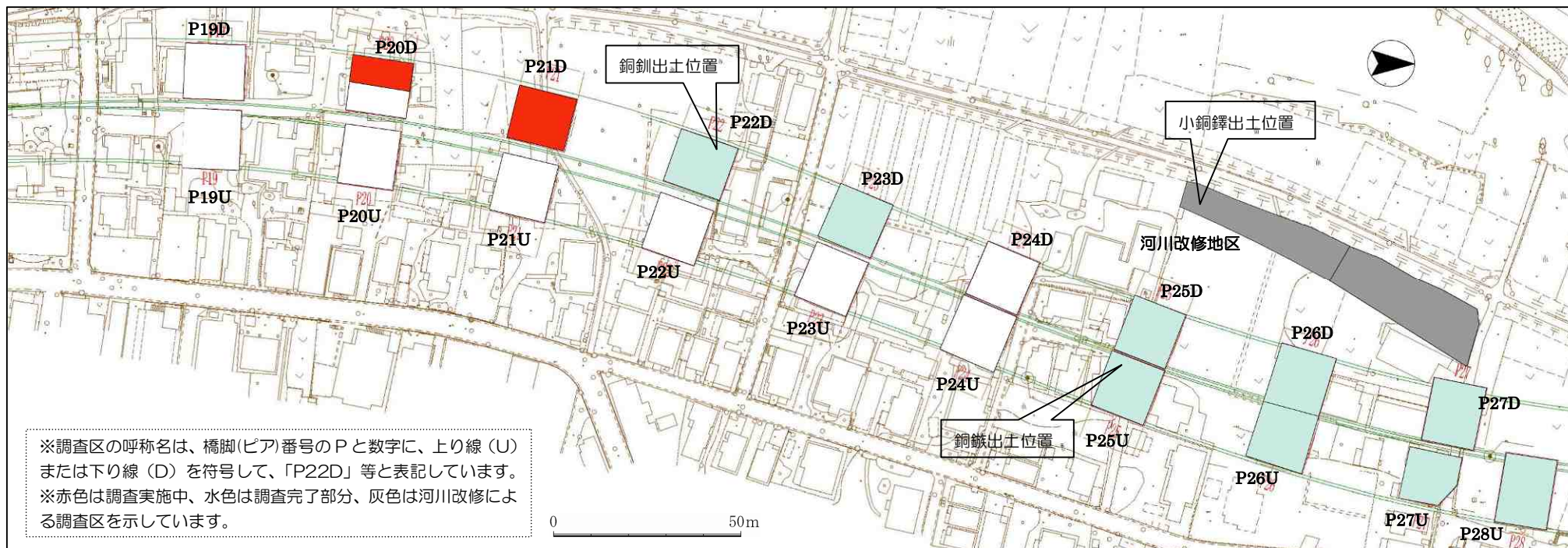


【謎の小石室】河原口坊中遺跡では古墳時代の小石室がみつかっています。小石室は古墳の横穴式石室と形は似ていますが、墳丘や周溝を伴うのか不明です。これまでに9基が発見されています。長方形に作られた石組みの内部は、長さ0.8~1.5m、幅0.4~0.5mです。大人を埋葬するには小さく、壁の高さは0.4mくらいで、人が横から出入りすることは難しい大きさです。石組みの石材は相模川の川原石を利用していたようです。

【小石室の副葬品】P23D地区で発見された小石室である1号石室の床面近くからは、床に敷かれた礫と一緒に碧玉製の管玉と水晶製の玉、ガラス小玉(ビーズ)がまとまって出土しています。これらは首飾りの一部に使用され、一般的に古墳や横穴墓から副葬品として出土します。土器が出土していないため詳しい時期は特定できませんが、小石室は古墳時代後期(7世紀頃)に作られた可能性があります。



【遺跡の立地】調査地点は蛇行する相模川の東岸で、氾濫原の中でもやや標高の高い自然堤防と呼ばれる部分にあたります。河川のもたらす肥沃な土地と水運の利便性があり、水害と闘いながら集落が営まれていました。



※調査区の呼称名は、橋脚(ピア)番号のPと数字に、上り線(U)または下り線(D)を符号して、「P22D」等と表記しています。
 ※赤色は調査実施中、水色は調査完了部分、灰色は河川改修による調査区を示しています。



【豊富な木製品】相模川の辺に営まれた遺跡であるため、地下水による影響で木材などが腐りにくい状態でした。初めて発見された古い時代の川跡部分からは、農具などの木製品が良好な状態で多数出土しています。

【各地の弥生土器】弥生後期では在産土器の他、東京湾沿岸に分布する久ヶ原式・三河の穴山式・西遠江の伊場式など、他地域の特徴が見られる土器が出土しています。遠隔地との密接なつながりが認められます。



【重なり合う遺構】調査区の土層を観察すると、新しい時代から古い時代まで連続して遺構がつくられています。平面的な広がりも折り重なるよう隙間無く、それぞれの時代を通じて生活の痕跡が認められることがこの遺跡の特徴です。特に弥生時代や古墳時代の住居は、同じような場所にいくつも重なっている状態で発見されています。相模川の度重なる氾濫により集落が流され、その都度住居の増改築をしている場合や一旦離れた後で、同じ場所に住まいを作った結果を示しています。

